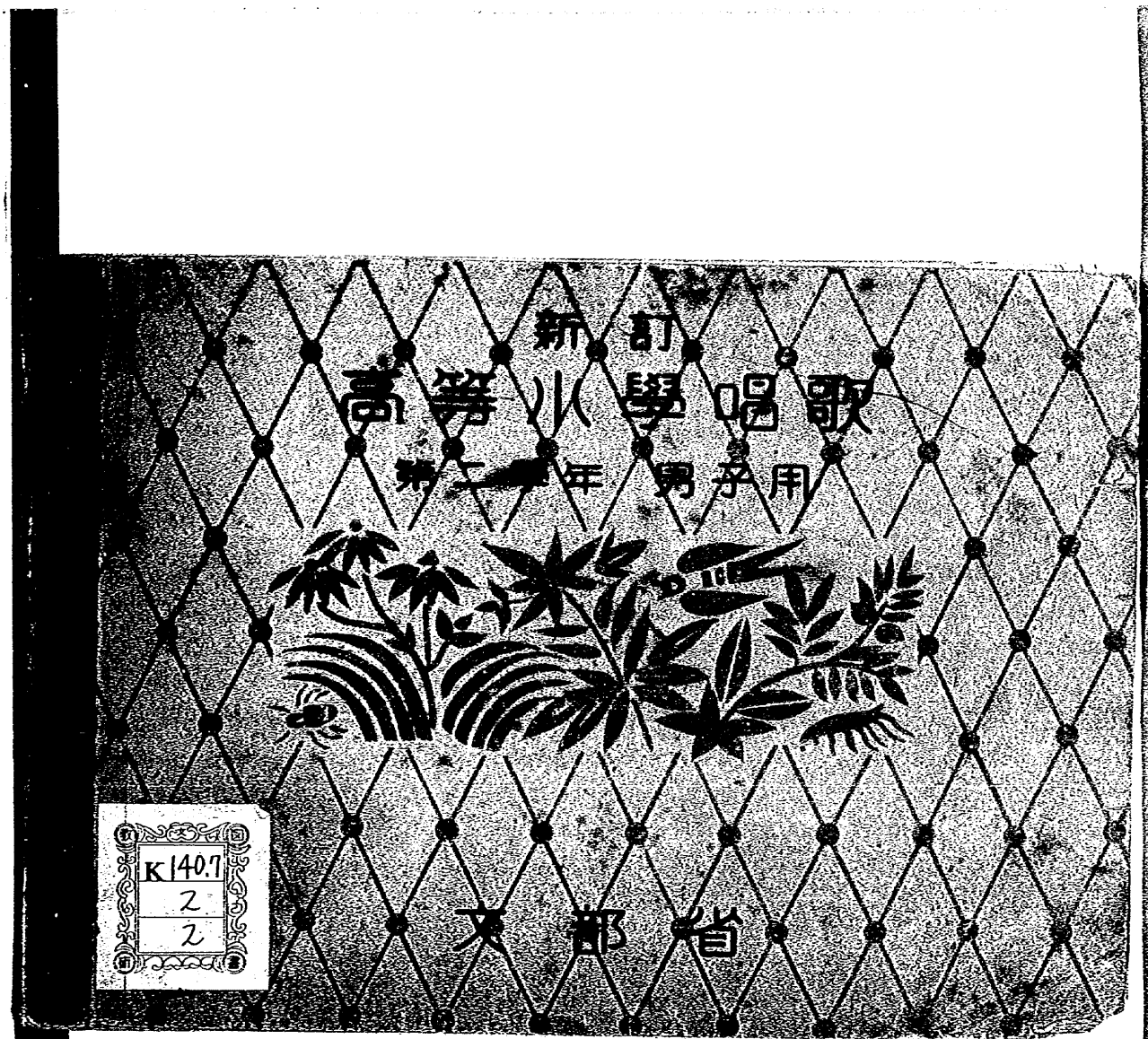


K140.7

2

2



新訂
高等小學唱歌

第二學年 男子用



教
育
部
K140.7
2
2
冊

文 部 省

新訂
高等小學唱歌

第二學年 男子用



文部省

緒 言

緒
言

- 一、本書ハ、音楽教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、高等小學校唱歌科ノ教科用トシテ、新ニ編纂セルモノナリ。
- 二、本書ハ、各學年ソレゾレ男子用ト女子用トニ分チテ編纂シ、何レモ毎卷二十二章トセリ。内、各十五章ハ、男子用・女子用共通ノ教材、他ノ各七章ハ、男子用・女子用ノ別ニ從ヒテ、歌詞・樂曲トモニ相異ナルモノヲ以テ充テタリ。
- 三、本書ノ歌詞及ビ樂曲ハ、歌詞ニ高等小學讀本・農村用高等小學讀本所載ノ韻文ノ一部（第一學年用「昭憲皇太后御歌」、第二學年用「夏の曉」、第三學年用「稻刈」）ヲ採用セル以外、總ベテ本省ノ新作ニ係ル。
- 四、本書ノ教材排列ハ、程度ノ難易ノミニヨラズ、一面、歌詞ニ示サレタル季節・行事ニ就キテモ考慮セリ。
- 五、本書ハ、取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類作製セリ。但シ、後者ハ、男子用・女子用共通ノモノト男子用・女子用各別ノモノトヲ併セ掲ゲタルヲ以テ、各卷二十九章ヨリ成ル。

- 緒
言
六、本書ノ樂曲ハ、事情ニヨリ、伴奏ヲ附セズシテ授クルモ差支ナシ。然レドモ、伴
奏ヲ附スルコトニヨリテ、タダニ歌唱ニ便スルノミナラズ、ナホ歌曲ノ興趣ヲ
増進セシムルコトヲ得ベシ。
- 七、唱歌曲ノミヲ掲ゲタルモノニ於テハ、伴奏ノ前奏・間奏・後奏ノ部分ニ對シテ、
必要ナル休止符ヲ附シ、又ハ休止符ト併セテ當該箇所ノ旋律ヲ記
シ、以テ歌唱ニ便ナラシメタリ。
- 八、本書ノ唱歌曲中、重音ノ箇所ハ、事情ニヨリ、上部主要旋律ノミヲ採リ、單音唱
歌トシテ課スルモ妨ゲナシ。其ノ際ニハ、正規ノ場合ト同一ノ伴奏ヲ得。
- 九、本書ノ樂譜ニ配當セル歌詞ノ記法ハ、概シテ新訂尋常小學唱歌
間、ナルベク發音上ノ實際ニ適切ナラシメンタメ、又ニ新ナル考慮ヲ加ヘタリ。
- 一〇、本書ノ樂曲ハ、概ネ中等諸學校ノ初年級並ビニ青年學校等ニ於テモ使用スル
コトヲ得ベシ。

昭和十年三月

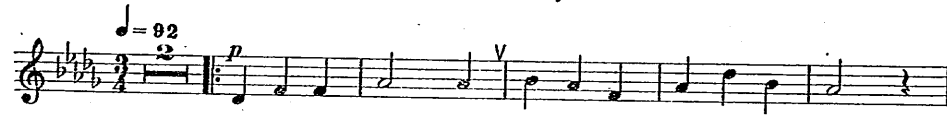
文 部 省

目 次

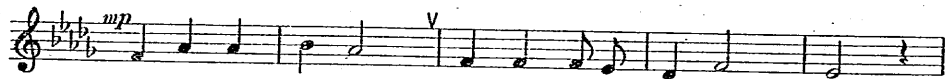
一 若 草.....2	一二 野 分.....40
二 千里の春.....6	一三 實のりの秋.....44
三 春の光景.....8	一四 聖 恩.....46
四 湖.....10	一五 明治神宮.....48
五 初夏.....14	一六 菊の香(二部合唱).....52
六 以.....16	一七 我が家.....54
七 春の光景(二聲輪唱).....18	一八 校庭にて.....56
八 夏の暁.....24	一九 吉野の宮居.....60
九 街路.....28	二〇 畿三題.....62
一〇 夕立そそ(二部合唱).....32	二一 兄 弟(二部合唱).....66
一一 山.....36	二二 告別の歌(二部合唱).....70
	二三 夕.....74

若 草

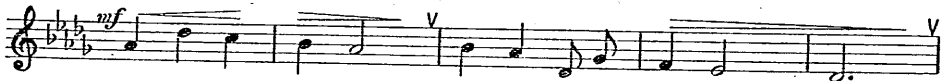
若
草



一ワカクサ ノ ノベノ カナタ ハ
二わかくさははるのしとねか



イソモナク スナハラモナ ク
くさのかをかぎつつすわり



ハテシナキ ウミニテアリ キ
ゆくりなく うみをはおもふ

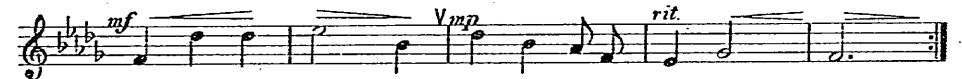
二



ウナバラ ノ アサニ ユフーベ ニ
うなばらもはるのひなれば



ナギサ フ ク カゼノ ゴトク ニ
わかくさはなみにもえずも



シホナリヲ ノベニテ キキヌ
かげろふーはうみよりたたん

若
草

三

一、若 草

一、若草の野邊のなたは、

磯もなく、

砂原もなく、

果しなき海にてありき。

海原の朝にゆふべに、

渚吹く

風の如くに、

潮鳴を野邊にて聞きぬ。

二、若草は春のしとねか、

草の香を

かぎつつすわり、

ゆくりなく海をば思ふ。

海原も春の日なれば、

若草は

波に萌えずも、

かげろふは海より立たん。

千里の春

千里の春

♩ = 80

のびやかに

一 ノー フー カー モー ミー トー
二 わー がー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
三 ウー ミー コー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

リ ニ モ エ テ ク サ ノ イ ロ ケ ム
ど の は こ り や ま と み ー づ 君 が
カ ノ カ ナ タ カウ ー ー ー リヤウ ー ハ セ タ

ル ガ ゴー トー シー オー ホー ゴー ラー モー カー
く が ごー とー しー て ふー とー りー もー はー
カ ク ノー ビー テ マー ー シウー ノー ツー

ス ナー ミー ワー ター リー テー ハー テー シー
な ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
チ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

六

1. 2. 3.

ラ ニ ハー ル ハ キー ター レ リ
コ ー ろ はー る は かー をー れ リ
ロ ー ト ハー ル ハ ワー ター レ リ

千里の春

二、千里の春

七

一、野も、丘も 緑に萌えて、
草のいろ 煙るが如し。
大空も かすみわたりて、
はてしらぬ 春は来れり。

二、わが祖國・郷土の誇、
山と水 畫がくが如し。
蝶・鳥も 花を求めて
行くところ、春は薫れり。

三、海越えて 遙かのかなた、
高粱は 背高く伸びて、
満洲の 土もやはらぎ、
ひろびろと 春は渡れり。

小鳥よ

♩ = 86

p コトリ ヨ オマヘハ ウミカ ラキタノ カ

mp コトリ ヨ オマヘハ ヤマカ ラキタノ カ

p キキナレ ス コトリノ コエ

mf ウミカ ラキ タヤウー ナ ヤマカ ラキ タヤウー ナ

p メヅ ラ シ イ コトリノ コエ *più p* ソナレ マツノ

mp ハ ヤ シ ニ ハレバレ トシター コトリノ コエー

小鳥よ、
お前は海から来たのか。
小鳥よ、
お前は山から来たのか。
聞きなれぬ小鳥のこゑ。
海から来たやうな、
山から来たやうな、
珍しい小鳥のこゑ。
磯・鰯松の林に、
はればれとした小鳥のこゑ。

三 小鳥よ

潮

潮

♩ = 50



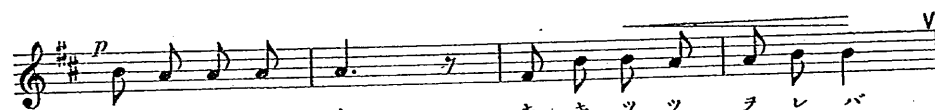
一 ハルノヒ ナレ ヤ ヒトリシ テ
二 はるのひ なれ や ゆくりなく



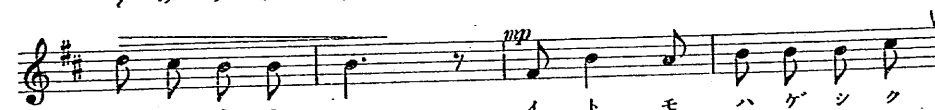
スナヤマノ カゲニ タタズ ミ
すなやまの うへに のぼりて



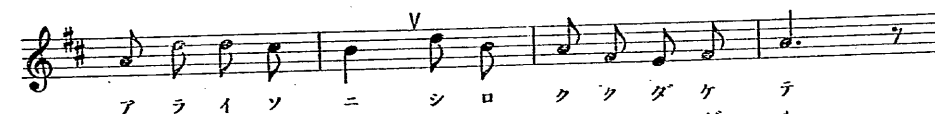
ケフ — — ハシーモ ウミノオト キク
けふ — — はしーも おきをながめつ



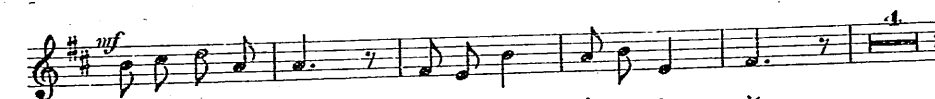
ウミノオト キキツツ チレバ
うみのおと ききつつ をれど



タツナミハ イトモハゲシク
たつなみは いともしづけく



アラISOニ シロククダケテ
あらいそにしろくうたずも



イハカゲニ カキモウマレン
いはかげに かきやうまれん

潮

二

四潮

一、春の日なれや、

ひとりして

砂山の陰にたたずみ、

今日はしも 海の音聞く、

海の音聞きつつをれば、

立つ波は、いとも はげしく、

荒磯に白く碎けて、

礁陰に、牡蠣も生まれん。

二、春の日なれや、

ゆくりなく

砂山の上にのぼりて、

今日はしも 沖を眺めつ、

海の音聞きつつをれど、

立つ波は、いとも しづけく、

荒磯に白く打たずも、

礁陰に、牡蠣や生まれん。

初夏

初夏

♩ = 96

一 ゴ グワ ツ ノー カ ゼー ハ サ リー ヤ カー ニ
 二 く さ の かー か をー る の のー む ねー に
 三 ニ と バ リー ミ チー ノ リヤウー ー ガ ハー ニ
 四 け や き のー み きー の ち にー た かー く

イ ロ ア ルー ゴ トー ク ナ ガー レー キー テ
 ひ は ひ ルー び ろー と き しー わー たー シー
 ツ ラ ナー ナ つ よー さ お かー はー しー
 し ゼ ん のー

ト ク イ ノー ソー ラー ハー ター ナー ター ミ
 ひ カ リ とー っ ちー のー びー びー びー
 ミ カ エ ノー カ グー モー ノー ー ー ー
 は ツ し はー さ すー がー ふー りー ー ー

rit. a tempo

ユ ルー カ ギー リ ハ ア フー キー カ ナ
 き もー の のー ま ふ か げー もー み ゆ
 ユ ルー ミ ドー リ ノ イ ロー マー シ ス
 つ はー き たー れ り あ たー らー し く

五初夏

五初夏

- 一、五月の風は、さわやかに
色ある如く流れ来て、
都會の空は、ただかなた
見ゆるかざりは青きかな。
- 二、草の香かをる野の胸に、
日はひろびろとさし渡り、
光と土の喜に
生物の舞ふ影も見ゆ。
- 三、新聖道の兩側に
つらなる並木、若葉して、
瑞枝の影も伸びやかに、
もゆる緑の色増しぬ。
- 四、櫻の幹の、地に高く、
自然の強さ思はしむ。
林はさすが舊りたれど、
夏は來れり、新しく。

小袖曾我

小袖曾我

♩ = 100

一 ソ が ノ ー ジフ ラウ ー ス ケ ナ リ ハ
二 は は は ー かね て の ち か ひ ゆ ゑ
三 は は は ー ユル ス ト に は ト コ トラ
四 は は の ー めく み に は トラ は

オ ト ウ ト ゴ ラウ ー ラ ト モ ナ ヒ テ イ マ
お と う と ゴ ラウ ー ラ ト モ ナ ヒ テ イ マ
キ ク ヨ リ ゴ ラウ ー ラ ト モ ナ ヒ テ イ マ
か た み の こ そ て い た だ き て ー ざ

ラ ー サ イ ゴ ノ イ ト マ ゴ ヒ ハ
クル ー ー ナ ミ タ を す け な り が ー
や ー ー か り は の さ つ は ラ ヒ モ
ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

一六

ノ モ ト ラ ツ ー タ ツ ネ ケ ル
の な さ け に ー と リ な し ク ぬ
ニ カ ト テ ノ ー モ ち が ー ふ

小袖曾我

一七

六、小袖曾我

- 一、曾我十郎祐成は、
第五郎を伴なひて
今を最後の暇乞
母の許をぞたづねける。
- 二、母はかねての誓ゆゑ、
第五郎を遠ざけて
かたく否むを、祐成が
兄の情にとりなしぬ。
- 三、「さらばゆるす。」と一言葉
聞くより、五郎は、嬉しさに
落つる涙をふり拂ひ、
ともに首途の物語。
- 四、母の恵に、同胞は、
形見の小袖を戴きて、
いざや狩場の五月晴
富士の裾野に立ち向かふ。

蓑 蟲

(二聲輪唱)

♩ = 69 *mp* 軽く

Ⅶ
Ⅱ

一ミノムシ ミノムシ ミノハ
三みのむし みのむし そとへ

一ミノムシ ミノムシ
三みのむし みのむし

mf

テノモノ カサガナ イ カサハ
でるにも でられな い みどり

ミノハ テノモノ カサガナ イ
そとへ でるにも でられな い

mf

ナケレド ミノサヘ アレバ アメガ
もえたつ わかばの なかで みのほ

カサハ ナケレド ミノサヘ アレバ
みどり もえたつ わかばの なかで

フツ テモヌレナイ ダラウー
いかにもぬげない だらうー

アメガ フツ テモヌレナイ ダラウー
みのほ いかにもぬげない だらうー

二^{mp}ミ ノ ム シ ミ ノ ム シ
四^pみ の む し み の む し

二^{mp}ミ ノ ム シ ミ ノ ム シ ミ ノ ヲ
四^pみ の む し み の む し ど こ に

ミ ノ ヲ ホ ス ナ ラ ア サ ガ ヨ イ
ど こ に ゐ る の か こ ゑ が な い

ホ ス ナ ラ ア サ ガ ヨ イ
ゐ る の か こ ゑ が な い

mf ツ ユ ハ
mp み の を

mf ツ ユ ハ オ チ テ モ コ エ ダ ノ ミ ノ ハ
mp み の を き だ ま ま か ほ さ へ だ さ ぬ

オ チ テ モ コ エ ダ ノ ミ ノ ハ フチウ ニ
き だ ま ま か ほ さ へ だ さ ぬ mf あ き が

フチウ ニ プ ラ リ ト オ チ ナ イ ダ ラウ ニ
mf あ き が こ な い と な か な い だ らう ニ

プ ラ リ ト オ チ ナ イ ダ ラウ ニ
こ な い と な か な い だ らう ニ

七、 蓑 蟲

一、 みのむし、 みのむし、

蓑は手のもの、 笠がない。

笠はなけれど、 蓑さへあれば、

雨が降つても、 濡れないだらう。

二、 みのむし、 みのむし、

蓑を乾すなら 朝がよい。

露は落ちて、 小枝の蓑は、

宙にぶらりと、 落ちないだらう。

三、 みのむし、 みのむし、

そとへ出るにも、 出られない。

縁もえたつ若葉のなかで、

蓑は、 いかにも、 脱げないだらう。

四、 みのむし、 みのむし、

どこにゐるのか、 聲がない。

蓑を着たまま、 顔さへ出さぬ。

秋が来ないと、 鳴かないだらう。

夏の暁

夏の暁

♩ = 108 *mf* 軽快に

一 ノ コ レ ル ツー キ ノ カ ケ フ ミ
二 ま た た く ほ し ム を い た だ き
三 ア サ ゲ ノ ケー ム リ ウ チ ナ ビ
四 い へ ぢ を い そ ぐ を と め こ

テ ウ タ フ シ ャ ウー カ モ サ ワ ヤ カ ニ ヲ
て つ ゆ の し ら た ま ふ み し だ き む
キ ア フ グ ヒ ノ デ ノ ウ ラ ラ カ ニ コ
が か ご に そ へ た る し ら ゆ り の に

ガ ハ ノ ホー ト リ ウ シ カ ヘ ル ム
か ひ の を か に ツ ま ぐ さ か る さ
ウ シ オ ヒ ツ み の カ へ コ が フ
は へ る ま み の や か に に あ

二四

夏の暁

mf *f*

ラ ノ ヲ ノ コ ガ ム ネ ノ ヘ ヲ フ
と の を と と め が ま へ が み を フ
ク ヤ ク チ フ エ イ サ マ シ ク ふ
し の は こ び も い そ い そ と セ

ク ヤ ア サ カ ゼ ソ ヨ ー ソ ヨ ト ハ
く や あ さ か せ そ よ ー そ よ と は
い き あ ふ る る あ さ ー ほ ら ケ は
は

タ ラ ク ミ ニ ハ ウ レ ヒ ナ シ
た ら ク ミ ニ は う れ ひ な し
た ら ク ミ ニ は の ゑ ゑ み あ り

二五

八、夏の曉

一、

残れる月の影踏みて、
歌ふ唱歌もさわやかに、
小川のほとり牛飼へる
村の男の子が胸の邊を、
吹くや朝風そよそよと。
働く身には憂なし。

二、

またたく星を戴きて、
露の白玉踏みしだき、
向かひの岡にまぐさ刈る
里の少女が前髪を、
吹くや朝風そよそよと。
働く身には憂なし。

三、

朝食の煙うちなびき、
仰ぐ日の出の麗かに、
小牛追ひつつ歸る子が、
吹くや口笛勇ましく、
生氣溢るる朝ぼらけ、
働く身には望あり。

四、

家路を急ぐ少女子が、
籠に添へたる白百合の、
にほへるまみのにこやかに、
足の運もいそいそと、
生氣溢るる朝ぼらけ、
働く身には望あり。

街路樹

♩ = 100
poco rit. mf a tempo

一 ア ツキ ヒザ シ ウケテ カ ゲヲ ヒト
二 し ろき ほこり おひて の べの とり

ニ アタフ が イロジュ が イロジュ シ ゲー レ
を し た ふ が いろじゆ が いろじゆ の びー よ

f のびのびと

ア タ ク ヒ ロ ク シ ゲー レ
た か く な が く の びー よ

p ソ ラ ク レ テ ツ キ ノ ボ リ ホ シ ミ チ テ
mf く も い て て か ぜ は し り き に る ら し

ツ ユ フ カ シ mp ネ ムー レ ガ イ ロ ジュ
よ る の あ め f ふ れー や が い ろ じゆ

p ハ タ タ レー テ シ タ タ ル
mf え に え にー を お ち く る

ツ ユー ハ ヨ キ ツ ユ ゾ
あ めー は よ き あ め ぞ

九、街路樹

一、暑き日ざし 受けて、

影を人にあたふ

街路樹 街路樹 しげれ

青く、廣く、しげれ。

空暮れて 月のぼり、

星満ちて 露ふかし。

ねむれ、街路樹 葉を垂れて。

したたる露は よき露ぞ。

二、白き埃 負ひて、

野邊の鳥をしたふ

街路樹 街路樹 のびよ、

高く、長く、のびよ。

雲いでて 風走り、

來るらし、夜の雨。

振れや、街路樹 枝枝を。

おちくる雨は よき雨ぞ。

夕立そそぐ

(二部合唱)

夕立そそぐ

♩=69 軽快に *mp.*

I
一 ラ イ ヒ ト シ キ リ カ ゼ ヒ ト ワ タ リ
二 き ぎ ざ わ め き て せ み な き や み て

II
一 ラ イ ヒ ト シ キ リ カ ゼ ヒ ト ワ タ リ
二 き ぎ ざ わ め き て せ み な き や み て

ク ロ ク モ ク ツ レ ソ ラ フ オ ホ ヒ ナ ナ メ ニ
く ろ あ り ん れ て み ち を ま よ ひ い け の も

ク ロ ク モ ク ツ レ ソ ラ フ オ ホ ヒ ナ ナ メ ニ
く ろ あ り ん れ て み ち を ま よ ひ い け の も

三二

ト ビ テ ユ フ ダ チ ソ ソ グ ヤ ツ テ ノ カ ゲ フ
た に き ゆ ふ だ ち そ そ ぐ い づ こ に ゐ た る

ト ビ テ ユ フ ダ チ ソ ソ グ ヤ ツ テ ノ
た に き ゆ ふ だ ち そ そ ぐ い づ こ に

夕立そそぐ

イ デ コ シ フ ト キ ガ マ フ ト キ ガ マ ヨ ロ コ ビ テ
ち ひ る き こ ひ の む れ こ ひ の む れ よ ろ こ び て

カ ゲ フ イ デ コ シ フ ト キ ガ マ ヨ ロ コ ビ テ
あ に る ち ひ る き こ ひ の む れ よ ろ こ び て

三三

一〇、夕立そそぐ

雷^{かみなり} 一^ししきり、風^{かぜ} 一^わたり、
黒^{くろ}雲^{くも} 斜^{しや}に飛^とびて、空^{そら}を おほひ、
八^やつ 手^ての 陰^{かげ}を 出^で来^きし 太^{たい}き 藁^{わら} (太^{たい}き 藁^{わら})
よろこびて、雨^{あめ} 手^てをつきて、
動^{うご}かざる 背^せを たたき、たたき、
夕^{ゆふ}立^{たち}そそぎ、そそぐ。

二

木^き木^き ざわめきて、蟬^{せみ} なきやみて、
池^{いけ}の 面^{おもて}に たたき、路^{みち}を 迷^{まよ}ひ、
いづこに のたる、小^こさき 鯉^{こい}の 群^{ぐん} (鯉^{こい}の 群^{ぐん})
よろこびて、左^{ひだり}へ、右^{みぎ}へ、
泳^{およ}ぎ 行^いく 背^せを たたき、たたき、
夕^{ゆふ}立^{たち}そそぎ、そそぐ。

夕立そそぐ

リヤウ テヲツキテ ウゴ カザ ルセヲ タタキ
ひに りへみぎへ およぎ ゆく せを に たき

リヤウ テヲツキテ ウゴ カザ ルセヲ タタキ
ひに りへみぎへ およぎ ゆく せを に たき

タタキ ユフ ダチ ソソギ ソソグ
た た き ゆ ふ だ ち そ そ ぎ そ そ ぐ

タタキ ユフ ダチ ソソギ ソソグ
た た き ゆ ふ だ ち そ そ ぎ そ そ ぐ

山

山

$\text{♩} = 108$

mp

一 ア アヒン ガシノ オ ホゾラ ニ
二 あ あらく じつ の い ろう け て

mf

ア マソソリ タ ツ ハ ルノ ヤ マ
を をしく そ び ゆ あ きの や ま

f

ネ グラヲ イ デーシ ア ラワ シー カ
を さ な き ひ よー り あ ふ ぎ みー る

山

mf

ミ ネノ イ ハ ホーヲ ト ビタ チ テ
み ね の い は ほーは わ かう ど に

f

ク モノ カ ナ タニ カ ケリユ ク
に か き り さう ー を さ づ け た り

mf

モ ロビト ア フケ シ ノ ノ メ ノ
も ろ び と あ ふ げ ゆ ふ ー や け の

mf

キ バウーニ ハユル ハルノ ヤ マ
へ い わ に は ゆ る あ きの や ま

poco rit.

二、山

一、 ああ、東の 大空に

天をそり立つ、春の山。

ねぐらを出でし 荒鷺か、

峯の巖を 飛立ちて、

雲の かなたに 翔り行く。

諸人あふげ、しのめの

希望に映ゆる 春の山。

二、 ああ、落日の 色うけて

雄雄しく聳ゆ、秋の山。

幼き日より あふぎ見る

峯の巖は、若人に

高き理想を 授けたり。

諸人あふげ、夕焼の

平和に映ゆる 秋の山。

野 分

野
分

$\text{♩} = 100$

一 フ ケ フ ケ ノ ワ ケ
二 ふ け ふ け の わ け
三 フ ケ フ ケ ノ ワ ケ

一 ラ カ ノ ス ス キ ラ オ シ ナ ビ
一 あ ま い ね む り の ゆ め さ め
一 ユ ク テ サ ヘ ギ ル モ ノ ハ ミ

ケ キ ギ ノ コ ズ エ ラ ユ ス フツ
ぬ ま ど の と び ら を ゆ り た た
ナ ツ ヨ イ チ カ ラ ニ ウ チ ナ ビ

四〇

野
分

テ フ ケ フ ケ ノ ワ ケ 一 オ
き ふ け ふ け の わ け 一 ひ
ケ フ ケ フ ケ ノ ワ ケ 一 ソ

モ ヒ タツ テ ハ ヤ メ ラ レ ヌ
と の こ こ ろ に て ん ね ん の
ラ ト ブ ト リ ノ ツ バ サ サ ヘ

ヲ ト コ ノ ヤ ウ ナ イ キ ホ ヒ テ
ち か ら の ほ ど を み せ て や れ
タ ワ マ ス ホ ド ニ フ キ マ ク レ

四一

二、野分

一、吹け、吹け、野わけ、

丘のすすきを 押しなびけ、

木木のこずるを ゆすぶつて。

吹け、吹け、野わけ、

おもひたつては やめられぬ

男のやうな いきほひで。

二、吹け、吹け、野わけ、

あまい眠の 夢さめぬ

窓のとびらを ゆりたたき。

吹け、吹け、野わけ、

人のこころに 天然の

力のほどを 見せてやれ。

三

吹け、吹け、野わけ、

ゆくてさへぎる ものは、みな、

強い力に うちなびけ。

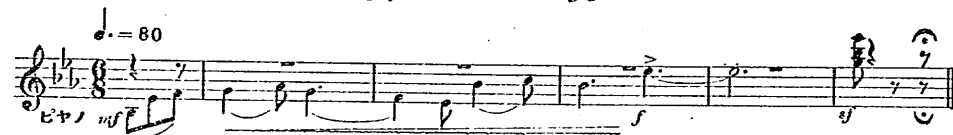
吹け、吹け、野わけ、

空飛ぶ鳥の つばささへ、

たわますほどに 吹きまくれ。

實のりの秋

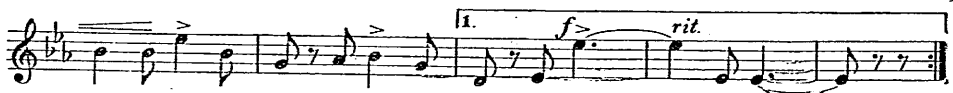
實のりの秋



一ミノリノアキハキタリヌ ユタケ
二たりほのいねはこかねに なみう

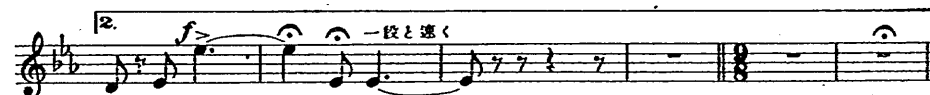


クモーカドタノアタリヨロコ
てりーみわたすたのもかちど



ビノコエノウヅマキウヅーマク
きはたかくとどろ

四四



きとどーろくー

二 垂穂の稲は、

黄金に波うてり。

見わたす田の面

かちどきは高く

とどろき、とどろく。

よろこびの聲の

うづまき、うづまく。

門田のあたり、

来りぬ、ゆたけくも。

一、實のりの秋は

一三 實のりの秋

實のりの秋

四五

聖 恩

♩ = 88

一 ア マ ツ ヒー ノ テ ラ サ ン キ ハ ミ
 二 と は き よー の つ た へ な れ ど も
 三 タ カ キ オー ン フ カ キ メ グ ミ ラ

mp

フ リ アー フー ゲ チ ヨ ダ ノ ミ ヤ キ
 か に のー こー る お ん し の み け し
 ア サ ユ フー ニ カ ウー ム ル ワ レ ラ

mf

オ ホ キ ミ ハ カ ミ ノ ミ ス エー ズ
 お み と し て き み に さ さ ぐー る
 ヨ ロ ツ ヨ ニ ス メ ラ ミ カ ドー ノ

f

カ シ コー シ ヤ ウ ヤ マ ヒ マ ツ レ
 ま ご こー ろ の た め し と な れ り
 ミ サ カー エ ラ コ ト ホ ギ マ ツ レ

mf

rit

一四、聖 恩

一、天つ日の照らさんきはみ、
 ふり仰げ、千代田の宮居。
 大君は神の御裔ぞ、
 畏しや、敬ひまつれ。

二、遠き世の傳なれども、
 香に残る恩賜の御衣。
 臣として君に捧ぐる
 まごころのためしとなれり。

三、高き恩、深き恵を
 朝夕にかうむる我等、
 萬代に、すめらみかどの
 御榮をことほぎまつれ。

明治神宮

明治神宮

$\text{♩} = 100$
 mf

一 ア サ ヒ ノ ゴ ト ク タ ダ シ ク ツ ヨ ク
 二 つ き ご と ふ か く と し ご と ひ ろ く
 三 タ フ ー ト キ タ カ キ イ ヤ シ キ ヒ ク キ

f

ヒ ト ス チ ナ ホ ク ヒ ラ ケ ス ス ム
 よ ろ こ ひ よ も に あ ふ れ み り て
 ク ニ タ ミ ナ ベ テ ヒ ト ツ マ ナ ゴ

mf v f

ヒ イ ツ ル ミ ク ニ ノ ヒ カ リ ヲ ツ ト ニ
 か い こ く に ほ ん の ゆ う 一 ひ の も と あ
 ア ハ レ ミ ハ グ ク ミ ミ チ ビ キ タ マ ヒ

四八

明治神宮

ff mf

ハ ナ チ タ マ ヒ シ オ ホ ー ミ カ ト
 か た め た ま ひ し お ほ ー み か ど
 チ カ ラ タ マ ハ ル オ ホ ー ミ カ ト

p mp

シ ツ マ リ マ シ マ ス ヨ ヨ ギ ノ ミ ヤ
 し づ ま り ま し ま す よ よ ギ の み や
 シ ツ マ リ マ シ マ ス ヨ ヨ ギ ノ ミ ヤ

mf $poco rit.$

ユ カ シ カ シ コ シ ヨ ヨ ー ギ ノ ミ ヤ
 ヲ か し か し こ し よ よ ー ギ の み や
 ユ カ シ カ シ コ シ ヨ ヨ ー ギ ノ ミ ヤ

四九

二五、明治神宮

一、朝日の如く正しく、強く、

一すぢ直く開け進む

日出づる御國の光を夙に

放ちたまひし大帝

しづまりまします代代木の宮

床し、畏し、代代木の宮

二、月ごと深く、年ごと廣く、

よろこび四方に溢れ満ちて、

海國日本の雄飛の基

固めたまひし大帝

しづまりまします代代木の宮

床し、畏し、代代木の宮

三、貴き、高き、賤しき、低き

國民なべて一つ愛兒

あはれみ、はぐくみ、導きたまひ、

力賜る大帝

しづまりまします代代木の宮

床し、畏し、代代木の宮

菊の香

(二部合唱)

♩=92

菊の香



一 ソ ラ キ ヨ ラ カ ニ ス ミ ー ワ タ
二 あ と に は つ つ く は な ー も な
三 ワ ガ シ キ シ マ ノ ク ニ ー ガ ラ



ル ー ア キ ノ ヲ ハ リ ニ サ キ ー イ テ テ コ
く ー ひ と り ひ さ し く に ほ ー ひ つ つ お
モ ー キ ヨ カ ー タ リ フ ク ー マ レ テ チ



コ ー ロ シ ツ カ ニ ヒ ー ト ー ノ ヨ ノ チ
く ー は つ ヲ し も か ー は ー れ ど も か ヨ
ヨ ー ニ ヤ チ ヨ ニ カ ー ギ ー リ ナ キ



リ サ ヘ ス エ ス キ ク ー ノ ハ ナ
は ら ん い ろ の き く ー の は な
ハ ヒ タ ノ ブ ル キ ク ー ノ ハ ナ

菊の香

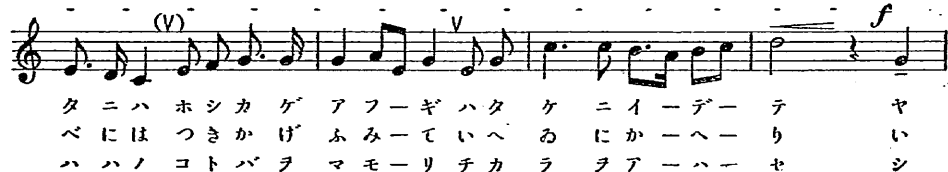
一六、菊の香

一、空清らかに澄みわたる
秋の終に咲きいでて、
心しづかに、人の世の
塵さへ据ゑぬ菊の花。
二、後にはつづく花もなく、
ひとり久しく匂ひつつ、
置くは、露霜かはれども、
かはらぬ色の菊の花。
三、わが敷島の國がらも、
清き薫にふくまれて
千代に、八千代に限りなき
齢を延ぶる菊の花。

五三

我が家

我が家



五四



我が家

一七 我が家

一、我が家は、貧しくも、
むつまじく、ぬるぬる、
朝には、星のしき家なり。
安らげ、出で、毎すごせり。
二、我が家は、何事も
業は、心であはせて
夕には、月かげふみて
一、我が家は、夏・冬も、
我が家は、夜も、おだしく、
三、我が家は、父のしき家なり。
親しみて、共にはたらく。

五五

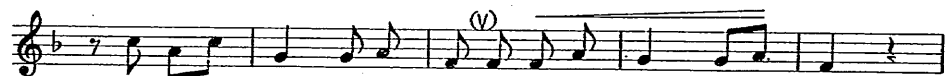
校庭にて

校庭にて

♩=88



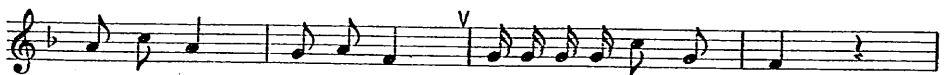
ユタケキ ハルノ アサヒヲ アビテ
二さやけき あきの ゆふーひの かげに



イマーゾ ラドルワカキ イノーチ
ともーとかた るこころ しづーか



アカヨ アカヨ マクルナカテ ヤ
みよや けふーも くれゆくそら を

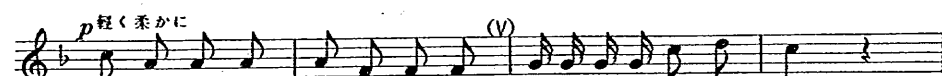


ツケヤ フセケ ソレシロシロ ヨ
ゆめと すぎぬ われらのやと せ

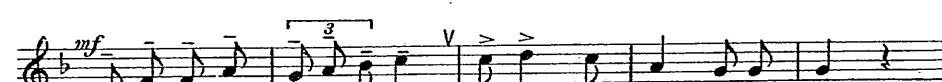
五六



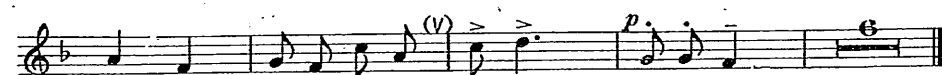
キヨキ チシホハ ホホニモエテ
をさ なき おもひで むね に わきて



タマウケ タマケル ラシヘノニハニ
まどとち ひとなき かうーしやのほとり



クワンセイ アガレバ コズエニヒビキ
うたごゑ はなてば こずゑにひびき



マンテイ ミルミル ハナ フブキ
きんせん ひらひら いてふ ちーる

校庭にて

五七

一八 校庭にて

一、 ゆたけき春の朝日を浴びて、
今ぞ躍る、若き命。

赤よ、赤よ、負くるな、勝てや。
突けや、防げ、それ 白 白よ。

清き血潮は頬にもえて、

球受け、球蹴る 教の庭に、

歓聲あがれば梢にひびき、

満庭見る見る、花吹雪。

二

さやけき秋の夕日の影に、

友と語る ところ静か。

見よや、今日も暮れゆく空を。

夢と過ぎぬ、われらの八年。

幼き思出胸にわきて、

窓閉ぢ、人なき 校舎のほとり、

歌声放てば梢にひびき、

金扇ひらひら、銀杏散る。

吉野の宮居

吉野の宮居

♩ = 80

一、メ グル シュン ジウー ゴジフー シ チ
二つ もる せ い さうー ごじふー し ち

バ ン ジョウー ノ キ ミ カ シ コ クー モ
ちゆう ー せ つ の し ん つ ぎ つ ぎー に

ナ ヤ マ セ タ マ フ ヨ シ ノ ヤ マ
み ま か り う せ ん よ し の や ま

ハ ナ ノ イ ロ ホ コ レ ト モ ハ レ ヤ ラ ス オ ホ ミ ウ タ
つ き の か ほ さ ゆ れ ど も か き く も る あ め の し た

p

ア ア ハ レ ヤ ラ ス オ ホ ミ ウ タ
あ あ か き く も る あ め の し た

吉野の宮居

一九 吉野の宮居

六〇

一、めぐる春秋 五十七
萬乗の君 かしこくも
なやませ給ふ 吉野山
花の色 ほこれども、
はれやらぬ 大御歌
あ、はれやらぬ 大御歌
二、つもる星霜 五十七
忠節の臣 つぎつぎに
身まかり失せぬ 吉野山
月の顔 さゆれども、
かきくもる 天の下
あ、かきくもる 天の下

霰 三 題

♩ = 144

mf 軽快に



二〇、驚三題

一、廂をたたく音高く、
命あるごとく争ひて。

はねて、跳りて、

鉢植の葉と葉に

萬年青の葉と葉に

ただ一粒が、紅の實に

ふと並びたる

散かな。

二

大空くらく、風うなり、
雲の上なる國原に

おぞや、戦の

始まりて、

たけなはなりとや、
飛來る如く、弾丸の如く、
今降りしきる散る如く、
散かな。

三

村より村へ、ひねもすを
手ぶり、足ぶりおもしろく

狼をまはして、

をどらせて、

疲れて歸る

背に寒寒と眠りをる

狼驚かす

散かな。

兄弟

(二部合唱)

兄弟

♩ = 68

1

p

弟カヘリミルサギリノカドニ
兄かたをかのさざりのはたに

カスミツツタツカゲハハハヨ
かすみつつくはふるはちちよ

mp

ワレラヲオーケル
あさよりはーげむ

ノアイトチカラニイキテ
きはひもなみだもとにもひ

♩ = 88

合唱

mf

六六

兄弟

cresc.

ラチネノオホキミ
としなみおひしわきよりの

エダワケシハラカ
のびのびつはづえとなりーやて

ff

ソノエダニハナノサカズバ
そのえだにはなをかざらん

dim.

ソノハナノ
そのはなに

rit.

アダニチリナバ
みをばむすばん

六七

二、兄弟

弟「かへりみる

狭霧の門に、

かすみつつ

立つ影は母よ、

我等を送る。」

兄片岡の

狭霧の畑に、

かすみつつ

鍬振るは父よ、

朝より勵む。」

この愛と力に生きて、

垂乳根の大き幹より

枝分けしはらかなれや。

「その枝に花の咲かずば。」

「その花のあだに散りなば。」

さきはひも、涙も、ともに、

ひとしなみ生ひし我等の、

伸び伸びつ秀枝となりて、

「その枝に花をかざらん。」

「その花に實をば結ばん。」

告 別 の 歌

(二部合唱)

告別
の歌

♩ = 84

ピアノ *mp*

mp

ハ ナ ハ サ ケ ド ト リ ハ ウ ター ヘ ト ワ
は の く さ き も あ た り の な が め も な

サ フ ヘ シ ヨ ロ コー ビ ア レ ド イ マ ゾ シ
つ か し の お も ひ で み ち て い ま よ り

ル ワ カ レ ノ コ コー コー ロ シ ノ キ ミ ノ
ぞ こ こ ろ に か かー る よ き と も よ

ややおそく
心をこめて

七〇

告別
の歌

mf *mf* *f* *poco rit.* *

ア ツ キ ミ タ シ ヘ カ ギ リ ナ キ ア イ ヨ ヒ カ リ ヨ
さ ら ば わ か れ ぞ ま こ と も て と は に お も へ や

Tempo I

mf *mp*

ワ レ ラ ミー ナ イ カ デ ワー スー レ ン コ ノ マ ド ニ
わ れ ら と て い か で わー すー れ ん こ の そ の に

1. *mp* 2. 4.

マ ナ ビー シ ヒ ター バ ニ に
む つ びー し ひ を は

* 此のフェルマータをもてる四分音符は、前段の速度をうけて約三拍の間延び。

七一

二三、告別の歌

一、花は咲けど、鳥は歌へど、

業卒へし喜あれど、

今ぞ知る、わかれの心。

師の君の厚き御教

限りなき愛よ、光よ。

我等みな、いかで忘れん、

この窓に學びし日をば。

二、庭の草木も、あたりのながめも、

なつかしの思出満ちて、

今よりぞ心に繋る。

よき友よ、さらば別ぞ、

信もて永遠に思へや。

我等とて、いかで忘れん、

この園に睦びし日をば。

發行所 大日本圖書株式會社

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者 大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地



昭和十年三月三十日
文部省檢査済

代表者 杉山常次郎

發行所 大日本圖書株式會社
總發行所 東京市京橋區銀座一丁目五番地

著作權所有 發行者 文部省

昭和十六年十二月三十日 總發行
昭和十六年十月二十五日 總發行
昭和十年三月三十一日 發行
昭和十年三月二十七日 印刷

定價 金拾貳錢

高等小學唱歌 第二學年 17

古書 271- 購入 小倉山 271-5

